KUTANism

産地のオンラインミュージアム

LIBRARY #01

秋元雄史がゆく、九谷焼の物語

第一話

九谷焼を再興した“陶石(=ルーツ)”を訪ねて

さまざまな場所を巡り、九谷焼を再発見していく本連載。
第一話は、九谷焼の主原料である陶石の採掘現場
「花坂陶石山(はなさかとうせきざん)」を訪ねます。

「LIBRARY　秋元雄史がゆく、九谷焼の物語」とは

2020.10.24〜12.20まで開催された「産地のオンラインミュージアム　KUTANism」の主要コンテンツの1つ。陶石から絵付け、そして料亭まで。九谷焼はいかにして生まれ、使われてきたのか。KUTANism全体監修・秋元雄史が、自らその現場に足を運び対話する中で、九谷焼の物語を再発見していく連載シリーズです。

Starting out as raw pottery stone, they are painted, and eventually served at traditional ryotei restaurants. Just how exactly did such Kutani ceramics come to be, and come to be used? Through this mini-series, rediscover the origins and evolution of Kutani ceramics, with KUTANism supervisor Akimoto Yuji as your on-site guide.

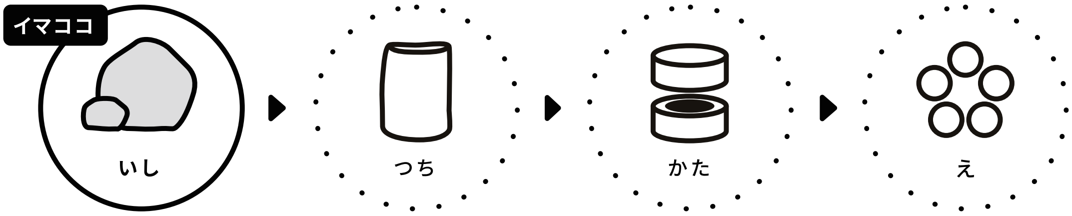
＼ WEB版はこちら ／

第一話

九谷焼を再興した“陶石(＝ルーツ)”を訪ねて

陶石から絵付け、そして料亭まで。九谷焼がいかにして生まれ、そして使われてきたか。KUTANism全体監修・秋元雄史が、自らその現場に足を運び対話する中で、九谷焼を再発見していく連載シリーズ「秋元雄史がゆく、九谷焼の物語」。

第一話は、九谷焼をつくる粘土の主原料であり「この陶石の発見がなければ、今日の九谷焼業界はなかった」といわれる「花坂陶石」の採掘現場を訪ねます。セミが鳴きしきる細い山道を進んだ先に突如として開けたその場所は、地層が露わになった断崖の下に白い石がゴロゴロと転がった、どこかこの世ならざる空気感。また、花坂陶石が採れる山のすぐそばには、かつて“再興九谷”の時代を牽引していった名工を多数輩出した「若杉窯」があった若杉町があります。あらゆる意味における“今日の九谷焼”のルーツを、石から探ります。



案内してくれた人

宮吉 勝茂さん

小松市吉竹町にある九谷焼窯元「(株)宮吉製陶」の2代目であり現代表取締役。花坂陶石の原石山管理を行う「石川県九谷窯元工業協同組合」前理事長を務め、現在は「CERABO KUTANI 」館長。

窯元組合が管理する原石山へ。(※通常は一般の方は入れません)

花坂陶石の原石山へ。
石に見る九谷焼のポテンシャル。

宮吉:今から向かうのが花坂町の「アザラ谷」といって、1817年に本多貞吉によって花坂陶石が発見された山です。実は1811年に、近くの「六兵衛山」で最初に陶石を見つけているんですが、ここのはあんまり質が良くなかった。

秋元:場所によって陶石の質というのは違うんですか?

宮吉:違いますね、やっぱり。

秋元:じゃあアザラ谷の陶石は質も量もよかったんだ。

宮吉:はい、アザラ谷が発見されたから、今日の九谷焼業界があるといっても過言ではないです。
古九谷の発祥である加賀市にも、大日山などにまだ陶石はあるにはあるのですが、山深くて採算が合わない。
それに陶石自体にもちょっとクセがあって、焼くのに工夫がいるんです。

アザラ谷に到着。

秋元：他の磁器産地の陶石と比べてどうなんでしょう？

宮吉：花坂陶石はどちらかというと鉄分が多くて、焼くと少し青っぽくなるのが特徴ですね。
有田焼の天草陶石のような“白さ”とはまた違います。松原新助（※）が「食器やっていても、
有田には勝てんから」と、全国の彫刻師を呼び寄せて置物を始めたのはそういう理由やとも言われています。

（※）明治に松原新助窯を築き、素地製造の専門窯元として独立。現在の九谷焼独特の生産体制の分業の基礎を築いたとされる人物。

秋元：伊万里焼と比べたりすると、粘土に粘りがありますよね？

宮吉：**ええ。陶石そのままで粘土にできるくらい、つくりやすいです。**
昔は山から採ってきた陶石単味で粘土をつくっていたほど。
蛙目（がいろめ）粘土や木節（きぶし）粘土といったものを足すようになったのは昭和入ってからですね。
今でも、ろくろの挽きやすさでいえば、九谷の陶石が日本一だと私は思っています。
コシがあるので、手捻りにしても、型起こしにしても良い。

九谷焼の主原料である花坂陶石

宮吉：こういう白いのが良い陶石ですね。赤っぽいのは酸化してしまったもの。

秋元：わ、意外と簡単に手でパリンと割れちゃうんですね！**キメも細かいし、確かに粘性もありそうだ。**

宮吉： ちょっと上ってみましょうか。見てください、ここに狸掘り（※2）した跡があるんですよ。
昔の人はどうやって鉱脈が分かったのでしょうね、こうやってピンポイントで陶石を見つけだしていたんです。

（※2）鉱山や炭坑で、無計画に坑道を掘ること。また、品質のよい石が出そうな部分だけ掘ること。

秋元：すごいな！狸の穴みたいだから“狸掘り”っていうのかな。

狸堀の跡。

宮吉：こういうところから掘り進めて行って、そのうちに坑道になって。
最近はもうシャベルカーなどの重機ですけどね。陶石はやわらかいので、重機で十分なんです。
戦後はこれに発破（※3）かけて採っていた時期もありましたけど。
昭和40年代くらいまでは、一軒一軒各零細に、各窯元で粘土もつくっていたんですよ。
よくやっていたと思います。そのあたりからどんどん忙しくなって、窯元は製品をつくることに専念するようになるんです。

（※3）岩石に穴をあけ、火薬を仕掛けて爆破すること。

秋元：あぁ、そこで分業化するんですね。産業としてのピークを迎えているのって意外と近代なんだなあ。
九谷焼と聞くと“古いもの”という印象を受けるけど、ついこの間まで産業として盛大だったということですよね。

宮吉：このアザラ谷に一番まとまって陶石があったんです。
1817年に発掘されてからずっと掘って、今はもう掘り尽くしてしまって山の形も変わってしまいましたが。
ここから鉱脈は続いていて、現在は「木和田（きわだ）山」という山で掘っています。そちらにも行ってみましょう。

車で数分先の木和田山へ。採掘の断面が露出していて迫力が。

今日の九谷焼に使用されている陶石の多くはこの山から。

秋元：すごいなこれは！ここの陶石は掘り尽くしてしまうということはないんですか？

宮吉：ここはあと30年くらいですかね。瀬戸あたりでは主原料である木節粘土や蛙目粘土の良いものが枯渇してきていたり。あちこちの産地で採算が合わなくて業者がやめてしまうということが起きてきています。
でも**花坂陶石においては、この山を採り切ってもまだ次に「新花坂」がある。そこにはあと数百年分の陶石が眠っていますからね。**

「新花坂」と呼ばれる山。

秋元：なるほど、陶石という視点から見たら、九谷焼が一番ポテンシャルがあると。なぜなら、少なくとも数百年分はつくれる"石"が確かにあるんだから。ちなみに、新花坂の陶石はどうやって見つけたんですか？

宮吉：ボーリングですね。

秋元：そっか、現代はボーリングだ。昔みたいに狸穴を掘ったりしなくてもいいんだ（笑）。

再興九谷の源流としての、
「花坂陶石」と「若杉窯」

宮吉：もともと、この辺は瓦屋だらけだったんですよ。戦後間もない頃は、その辺の田んぼで採った赤土からいろんなものつくっていましたよ。今はほとんど使われちゃいましたけど、今でも田んぼの下には赤土のような瓦焼きに使える土がある。

秋元：なるほど、この界隈では焼き物をやっていたという素地があったんですね。
九谷焼が突然発生したわけじゃなかったんだ。瓦って、確かに昔はその地方ごとにつくっていましたもんね。
いつの間にか大手に取って代わられちゃったけど。

宮吉：花坂陶石を見つけた本多貞吉をここに引っ張ってきた林八兵衛という人も、庄屋（※5）といいながらも瓦屋の親方みたいなもんだったんですよ。

（※5）江戸時代、代官の指揮のもとで村の事務を統轄する者で、今の村長にあたる。加賀藩では十村（とむら）と呼んだ。

秋元：若杉窯は、分け方としては「再興九谷（※6）」になるんですよね？

（※6）古九谷の復活に向けて、大々的に九谷焼の窯々が興った時期に生まれた九谷焼を指す。

宮吉：はい。再興九谷の始まりは、京都の青木木米（もくべえ）が加賀藩の招きで金沢の「春日山窯」にやってきたことがきっかけと言われてますよね。

秋元：ええ。金沢には大樋焼の粘土が採れたから、きっとあのあたりで陶石を探したんでしょうね。

宮吉：確かにそれがきっかけではあるんですが、金沢城で火事があって、藩窯（※7）として始まった春日山窯が、あっという間に民窯に変わってしまった。金沢近郊では陶石も見つからなかったですし。

（※7）江戸時代、諸藩で経営した窯。

秋元：それで青木木米は京都に帰っちゃたんですもんね。

宮吉：そうです、たった2年で帰りました。そのときに、青木木米の弟子として付いてきていたのが本多貞吉だった。青木木米は、彼をこの地に残していったんです。本多貞吉が花坂陶石を探し当て、そして林八兵衛の招きで若杉窯をつくった。**だから。実質、再興九谷のきっかけとなったのは若杉なんです。本多貞吉が、アザラ谷に陶石を発掘してくれなかったら、今日の九谷焼はないということなんです。**

秋元：だから骨董好きの人たちは、若杉窯のものを欲しがるのか。そういう人たちは、だいたい“源流”が好きだから。

宮吉：“九谷焼”の名前を復活させた、吉田屋窯の職人も若杉窯から出向いているし、九谷焼の産業基盤を築くことに貢献した九谷庄三や斎田道開も、若杉から職人としてのキャリアを始めています。

秋元：**そうか、やはり若杉が再興九谷における源流ということか！**
断片的だったことがだんだん繋がってきました。

陶石×釉薬×技術—。
有機的な絡み合いが生み出す“産地色”

宮吉：陶石の一部は九谷焼の釉薬づくりにも使われているんですよ。

秋元：そうなんですね。釉薬も地元でつくっているんですか？

宮吉：県内では釉薬屋がなくなってしまって。今は美濃の釉薬屋にノウハウを教えてつくってもらっているんです。九谷焼において釉薬はとても重要なものなので、本来なら産地内でつくれたら良いのですが。

宮吉：釉薬の和絵の具には、有鉛のもとと、鉛をうんと少なくした絵の具と、無鉛の絵の具と。三種類くらいあります。無鉛の絵の具が一番剥落しやすいんです。

秋元：皮肉なもんで、有鉛の絵の具の方が付きがいいんですね。

宮吉：付きがいいけど、それでも有田・美濃の素地では剥落してしまうんです。「釉裏金彩（※7）など、上絵窯で何度も焼かんなん技法だと特に。厳密に言えばできないことはないのだろうけど「なぜ九谷焼では釉裏金彩をあんなに安くできるのか」と不思議がられるほど。

（※7）切り抜いた金箔を貼り、透明度の高い釉薬をかけて焼き上げる技法。

秋元：おもしろいな。それって何の違いなんですか？

宮吉：技法というか、粘土と釉薬の兼ね合いですね。

秋元：九谷焼ではできて、他の産地では難しい技法って釉裏金彩以外にどんなものがあるんですか？

宮吉：いわゆる「青手（※8）」とよばれる、和絵の具を盛って描いていくような絵付け技法は大概、他の産地の素地では難しいと思います。

（※8）緑・黄・紫・紺青の四彩で器全体を塗り埋める様式。油絵のような濃厚な彩色が特徴で、九谷焼を代表する様式の一つ。

「古九谷青手芭蕉図平鉢」／能美市九谷焼美術館 五彩館 所蔵

秋元：そうか、粘土と釉薬と、そして技術の兼ね合いなんだ！ **今風にいえば“不純物”があるというか、完全に人工的な無機物にはないおもしろさが工芸にはありますよね。**その土地の特質と絶妙に関わりながら技術展開をしていて、その微妙な差がいろんなものを生み出している。これは単なる後付けの“郷土色”ではない、先人が材料と格闘しながらつくってきた技術ですよね。**今日における“産地”の意味は、その辺にありそうだなぁ。**これは初回にして幸先がいいぞ！貴重な機会をどうもありがとうございました。

【PROFILE】
秋元雄史／東京芸術大学大学美術館館長・教授。
練馬区立美術館館長。「KUTANism」総合監修。

▶▶ NEXT ▶▶

第二話

九谷焼の土台を守る、
磁器土づくり

KUTANism

主催：KUTANism実行委員会　共催：能美市、小松市　協力：石川県九谷窯元工業協同組合、石川県陶磁器商工業協同組合、九谷上絵協同組合、九谷焼団地協同組合、公立小松大学、こまつKUTANI未来のカタチ、小松九谷工業協同組合　後援：北國新聞社、認定NPO法人趣都金澤

クタニズム実行委員会事務局
〒923-1198石川県能美市寺井町た35（能美市役所 産業交流部 観光交流課内）MAIL：info@kutanism.com

クタニズム

https://kutanism.com